

小机城を明らかに

— 小机城跡埋蔵文化財試掘調査について —

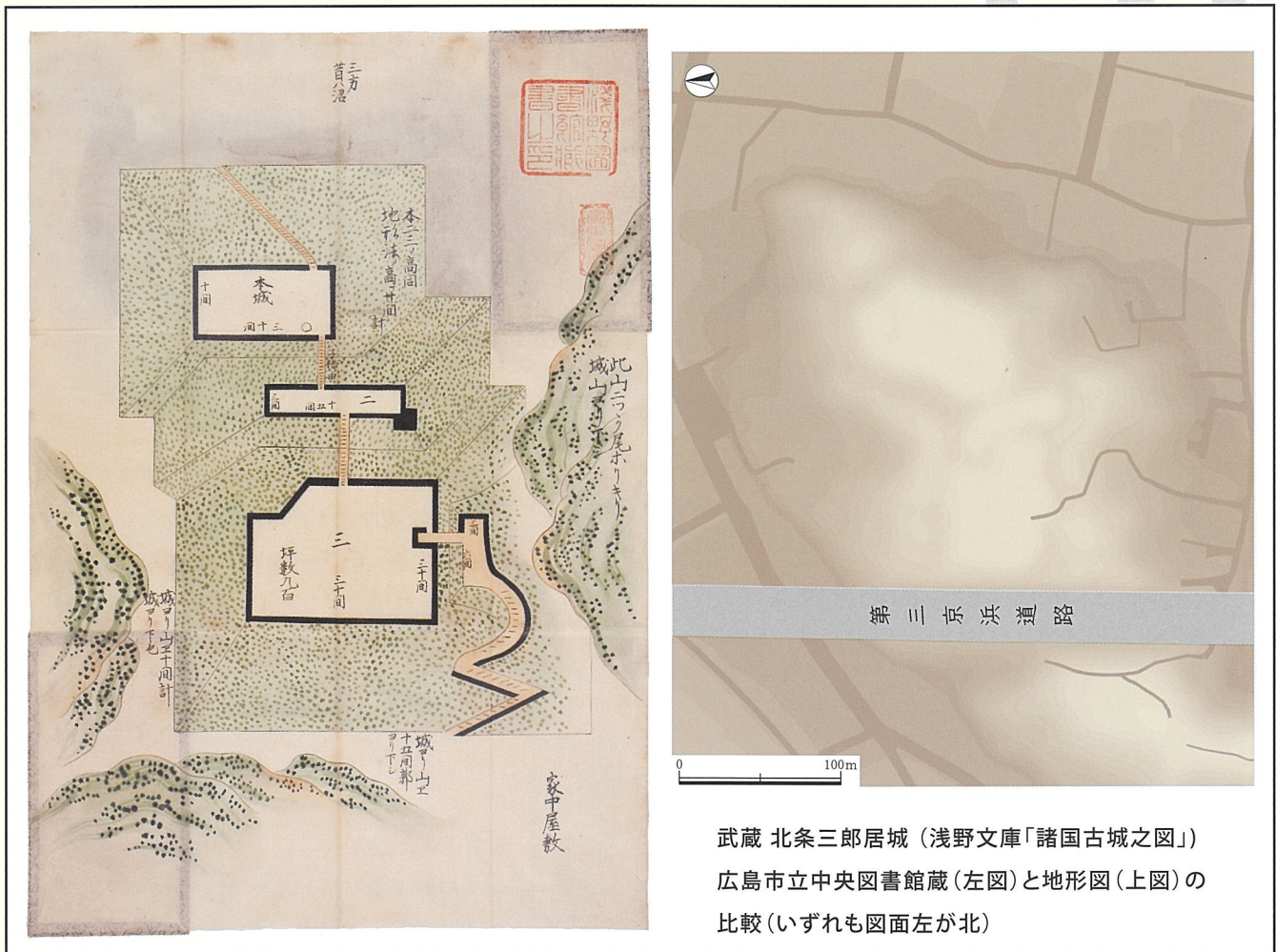
1. 調査開始のご挨拶

宮田 純一（横浜市教育委員会事務局 生涯学習文化財課長）

小机城は、1400年代（15世紀）の半ば頃に築城された城跡で、実際に戦の舞台にもなった場所です。戦国大名「小田原北条氏」の関東進出の足掛かり（重要な軍事拠点）としての役割も担っていました。戦国時代を過ぎると、戦のない平和な時代が徳川氏によりもたらされ、小机城もその使命を終える事となります。歴史の表舞台から姿を消した小机城ですが、市内の遺跡が検索できる「文化財ハマsite」で調べると、「埋蔵文化財包蔵地＝遺跡」として周知されており、市の中でも最も保存されている遺跡（城跡）の一つとして挙げられています。

昭和38年（1963）、いわゆる第三京浜道路の建設で、縄張（なわばり、城の範囲）の一部が発見されました。文化財保護法による埋蔵文化財保護制度は既にありましたが、戦後の高度経済成長の背景もあり、十分な調査がなされることはありませんでした。このような経過を経ていますが、昭和52年（1977）、現在の「小机城址市民の森」として公開が始まり、市民の森愛護会に代表される地域の人々や、小机城のあるまちを愛する会等の活動もあって、市民に親しまれている小机城が確立されていきます。

市教育委員会では、この小机城跡について、より良い保護（保存と活用）方法を検討し、未来に継承するため、保存目的の各種調査を検討しており、今回の調査はその第一歩として、小机城跡の実態に迫るための発掘調査を実施します。調査の実施にあたり、地域の皆様をはじめ、関係の皆様方にご理解とご協力をいただきますことに深く感謝申し上げます。



武蔵 北条三郎居城（浅野文庫「諸国古城之図」）
広島市立中央図書館蔵（左図）と地形図（上図）の
比較（いずれも図面左が北）

2. 小机城の発掘 豊かな文化資源の保存と活用に向けて

五味 文彦（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 代表理事）

横浜市域は、古代には武蔵の国の南部・相模国と房総半島とを結ぶ位置にあり、中世には幕府が置かれた鎌倉の後背地として経済や軍事を支え、江戸時代には大都市江戸の経済を支えつつ街道を通じて全国とつながっていきました。東西および南北の地域の中継が、横浜市域の歴史上の特徴と言えるでしょう。

小机城は、市域北部を流れる鶴見川に沿い、陸路で鎌倉と神奈川湊、武蔵国府中を結び、江戸と相模中央部を結ぶ交通の要衝、また戦略上の重要な位置に存在します。堅固に築かれたことは、太田道灌（おおたどうかん）がここを攻めて容易に落とせなかったことがよく物語っています。戦国大名小田原北条氏は、小机衆という侍衆を周辺に配置し、小机城を「小机領」の拠点としました。この「小机領」の範囲は横浜市域の北側半分に相当し、たとえば小机三十三観音霊場の名称の如く、現在に至るまでそのまとまりを伝えています。

横浜市は、その当初は開港場を中心としてスタートし、徐々に市域を拡大していきましたが、この開港場横浜の後背地としてその経済を支えたのが、小机城を中心とした「小机領」でした。小机は大横浜の誕生に大きな役割を果たしたと言えるでしょう。現在の市域に至る過程でも、小机領の編入が市域のまとまりを生み出したことは間違いありません。

本年、横浜市域のかなめともいえる小机城は、教育委員会および(公財)横浜市ふるさと歴史財団、港北区役所の連携により、初の発掘調査を行います。小机城跡は昭和52年(1977)に開園した小机城址市民の森公園に内包されて、史跡の範囲はほぼ維持されており、毎年開催される「小机城址まつり」は地域の人々の歴史や文化を醸成する風土を創出していて、発掘調査の成果への期待もふくらみつつあります。周辺に目を転じれば、すでに発掘調査の進む城跡は複数あり、国史跡の小田原城(小田原市)や八王子城(八王子市)を始め、近年には河村城(山北町)が県の史跡に指定されています。全国で城ブームの起きている現在、小机城の発掘調査は全国の人々から注目されていると言えるのではないのでしょうか。

本年からはじまる小机城の発掘調査は、きわめて重要な意味をもっています。調査によって城が戦略的にいかに築かれたか、周辺の地といかに結ばれてたか、城郭の構造や遺構、さらには遺物などが明らかになるかもしれません。調査の成果を期待をもって見守りましょう。そして成果を見守るだけでなく、小机城周辺の地形や近年までの歴史を改めて調べてみましょう。そうすることで小机城を中心とする横浜市域の独自の特質が見えてきます。

小机城は関東で有数の城跡であり、貴重な文化資源です。その調査の最初に立ち会える幸運を、是非地域のみならずと享受したいと考えています。そして何より、本年から始まる小机城の調査研究が、今後長期にわたって続き、やがて横浜市および地域に豊かに還元されていくことを願ってやみません。



鎌倉街道と小机

(峰岸純夫「鎌倉街道上道—「宴曲抄」を中心に—」

『多摩のあゆみ』92号、1998年より一部改変して作図)

3. 小机城をめぐる歴史

あすわ はるみ
阿諏訪 青美 (横浜市歴史博物館 主任学芸員)

小机城は、鶴見川中流域の南岸より北に張り出す台地上に位置し、古くから鶴見川舟運(しゅううん)の拠点でした。またいわゆる鎌倉街道が対岸の新羽を経て帷子(かたびら・保土ヶ谷区)にのびていて、小机城は陸上と河川交通をつなぐ物流の要衝だったようです。

文献資料では、室町時代の文明10年(1478)に長尾景春(ながおかげはる)の乱の収束のために、太田道灌(おおたどうかん)が景春与党の立て籠もる「小机要害」を攻撃したとあるのがその初見です。戦国時代に関東を支配した小田原北条氏は、15世紀末頃に相模国に進出し、16世紀半ば頃には小机城付近を支配下に治めました。多摩川以北の江戸城を巡る戦いに際しては、小机付近でもいくつもの合戦が起こったと思われます。

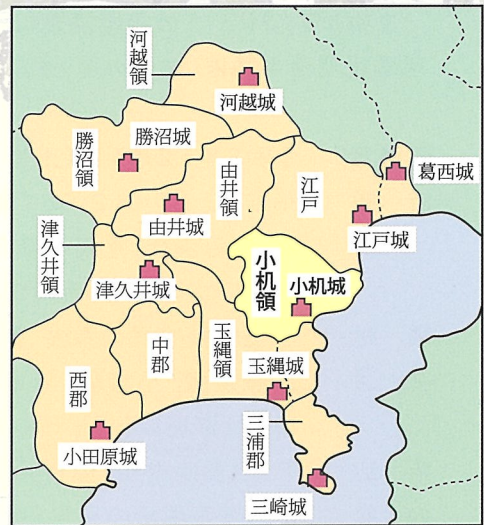
小机城は当初玉縄城(たまなわじょう・鎌倉市)の管轄下となり、城代に伊勢宗瑞(いせそうずい・北条早雲)の旧臣である笠原信為(かさらはのぶため)が入りました。信為は古刹雲松院(うんしゅういん)を菩提寺とし、「早雲寺殿御茶湯分」(伊勢宗瑞の供養料)5貫文を寄進しています。その子孫は代々城代を務め、雲松院には笠原家歴代の墓が祀られています。いっぽう小机城の初代城主には、伊勢宗瑞の末子・北条宗哲(幻庵)の息子・三郎が就きましたが、この三郎は夭折したようで、以降2代氏堯(うじたか)、3代氏信(うじのぶ)、4代氏光(うじみつ)と続きます。

北条氏は、支城を中心にそれまでの行政単位を越えた「領」支配を行い、「小机領」は久良岐郡(くらぎぐん)の一部と都筑郡、橘樹郡(たちばなぐん)の一部(市北部域・川崎市・町田市の一部)を含みました。領内には城主の北条氏堯や氏光が領内の百姓に発給した古文書が遺るほか、戦国末期の天正16年(1588)には

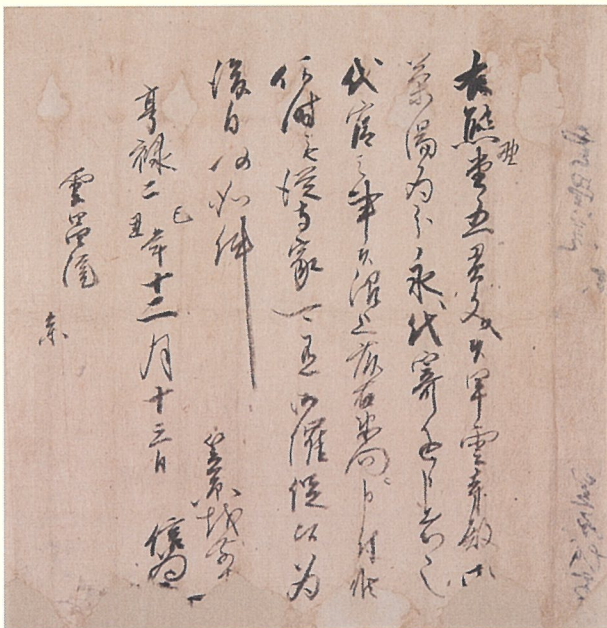
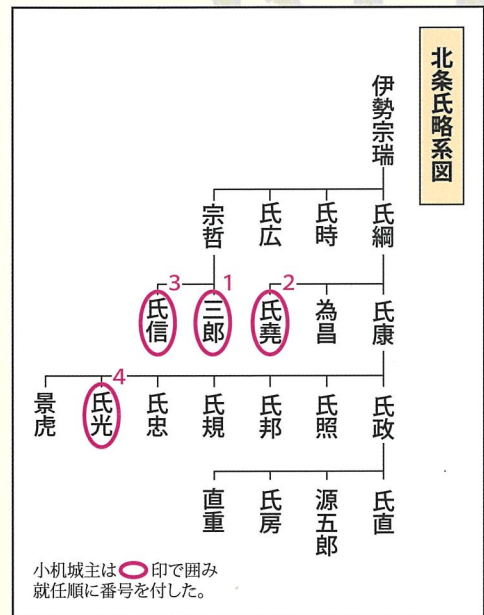
領内村々の百姓中へ宛て、15歳~

70歳までの男性は武器を持って城に集まるように命じていて、合戦に備えて百姓たちを徴兵する準備をしていたことがうかがえます。

小机城の構造を示す最も古い絵図は、江戸時代になって広島藩主浅野氏が描かせた「諸国古城之図」のうち「武蔵 北条三郎居城」です(表紙下図)。東郭部分に「本城」、帯郭に「二」、西郭に「三」と書かれていて、現在の構造とそれほど変わっていません。しかし鶴見川舟運と鎌倉街道という物流の拠点という視点に立てば、城の歴史はおそらく中世以前にさかのぼるのではないのでしょうか。発掘調査による築城年代の比定がまたれます。



氏綱時代の北条氏の支配領域図
(黒田基樹『戦国北条五代』(星海社、2019年)より一部改変して作図)



笠原信為判物 享禄2年(1529) 港北区雲松院蔵

4. 現場説明会の開催・地域の皆様へのお願い

(1) 現場説明会

令和3年(2021)の発掘調査に伴い、調査成果を地域の皆様にご覧いただくため、次のとおり現場説明会を開催しますので、ぜひお越しください。

開催日：令和3年12月4日(土)

時間：午前10:00~12:00(集合10:00) / 午後13:00~15:00(集合13:00)

※ 小雨決行、荒天の場合は翌日に順延させていただきます。

※ マスクの着用、手指消毒、ソーシャルディスタンス確保へのご協力をお願いします。

場所：小机城址市民の森内 発掘調査現場

交通：JR横浜線「小机駅」降車 徒歩約15分(下図参照)

※ 駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用のうえ、お越しください。

申込：不要(参加自由・無料)

内容：発掘調査現場の見学・専門職員による解説

問合せ：横浜市教育委員会事務局 生涯学習文化財課 文化財係

電話 045-671-3284/080-1270-6314(当日連絡先)

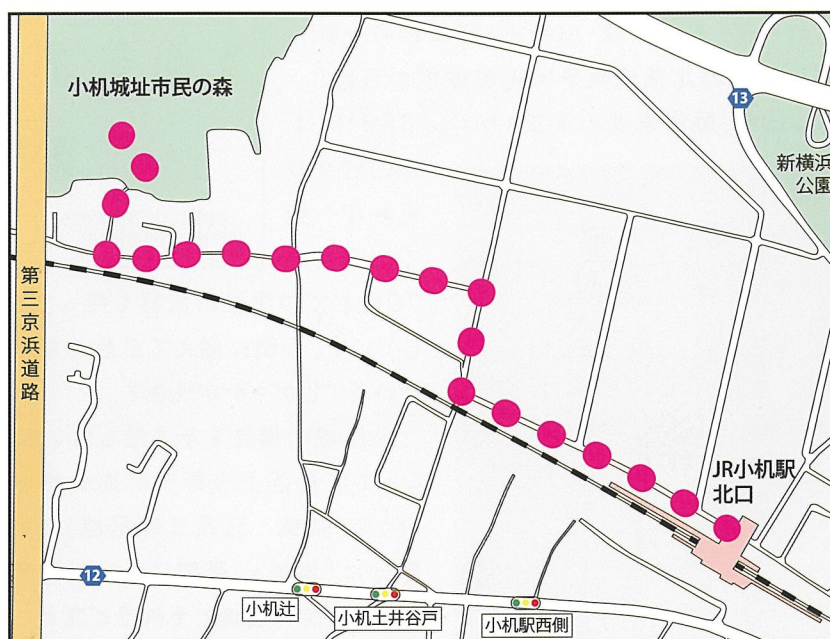
主催：横浜市教育委員会

共催：公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター

(2) 地域の皆様へ

見学をご希望される方は、上記の現場説明会にお越しください。

ご都合がつかない等の理由でその他の日程での見学を希望される場合は、必ず周辺の関係者にお声掛けのうえ、指示に従って安全な見学をお願いします。なお、その際、安全管理上、バリケードの外側からの見学をお願いする場合がありますので予めご了承ください。



現場説明会
案内図

小机城を明らかに - 小机城跡埋蔵文化財試掘調査について -

発行日：令和3年10月1日

発行：横浜市教育委員会

編集：公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター